

文学博士笹淵友一君の「近代日本文学における浪漫主義の研究」に対する 授賞審査要旨

本研究は「浪漫主義文学の誕生」、「『文学界』とその時代 上」、「同 下」の三卷より成り、三卷を通じて『文学界』を焦点とする浪漫主義文学の研究」を副題としてあるごとく、主として雑誌『文学界』によつて起こつたいわゆる前期浪漫主義の内容と性格とを検討したものであるが、さらに後期浪漫主義、新浪漫主義にも論及し、近代日本浪漫主義文学の全貌を展望して、その精神構成を解明したものである。

著者は第一巻の序説において、この研究の方法論として、西欧文学の影響、キリスト教との交渉、日本乃至東洋の伝統文学との関係の三観点を重視し、序説第一章には、バビット、ペイター、ヘッジ、ビアーズ、グリアースン、アバクロンビ等の英米文学評論家、ハイム、ゲルウィヌス、シュトリッヒ、ブリュンティエール、ラセール、ソーニエ等のドイツ、フランス文学評論家二十数名の説を参照し、ロマンティズムの本質属性を検討して批判の尺度とし、序説第二章では、主としてウェーバー、トレルチ等の見解を参照して、西欧近代精神の形成に対するキリスト教の意義を明らかにし、序説第三章では、日本浪漫主義文学の時代を、明治二十五年まで、明治三十二年まで、明治四十一年まで、大正元年まで、大正十五年までの五時期に分ち、浪漫主義史観の成立を述べ、序説第四章では、我が浪漫主義と交渉する重要な伝統思潮を求めて、その積極的意義と限界とを問題とした。

ついで本論に入り、明治文学の黎明期における先駆者及びその業績、例えば、新体詩抄、小説神髓、聖書及び讚美

歌の和訳、また徳富蘇峰、矢崎嵯峨の屋、幸田露伴、森鷗外、宮崎湖処子等を挙げて、上述の観点よりこれを評価し、その浪漫色調と背反性とを指摘した。

第二巻は文学界同人―北村透谷、星野天知、戸川秋骨、平田禿木、上田敏、馬場孤蝶―論であり、第三巻はその続編であつて、島崎藤村論から始められている。この同人論は列伝体的に並叙されていて、その人々の重要性に応じて透谷にはA五判四一―ページ、藤村には四四六―ページ、その他の人々には数十、百―ページを費やし、叙述に精粗厚薄はあるが、すべてその伝記資料と全作品とを精査して、各人の特異性と普遍性とを考察し、その相互関係及び『文学界』思潮の推移を解明した。蓋し『文学界』思潮の緻密な分析批判を行なうには、同人の一々についての精細な究明が必要であつて、これを本研究の中心課題とした所以である。

さらに『文学界』同時代論として、『文学界』客員論の章を置き、樋口一葉、田山花袋、戸川残花、大野洒竹、松岡国男、『文学界』とは関係の少なかつた国木田独歩、中野道遙、土井晚翠、川上眉山、泉鏡花等を列叙すること同人論と同じく、その量においても同人論に次ぎ、五二二―ページを費やしている。

さてこれに次ぐに高山樗牛、綱島梁川、薄田泣菫、蒲原有明、与謝野鉄幹及び晶子等を始めとする後期浪漫主義概説、永井荷風、北原白秋、木下左太郎、吉井勇、高村光太郎、三木露風、谷崎潤一郎、小川未明、鈴木三重吉等の新浪漫主義素描の二章を以てして、『文学界』以後の展開を示し、最後に『文学界』同人を焦点とする近代浪漫主義文学の性格を帰納して本研究の結語とした。

著者は明治大正期における日本文学の発展に対して欧米文学及び思想の影響を重視し、ことにキリスト教文学との

接触により浪漫主義文学が強烈な刺激を受けたことを認めて、その関係を明らかにすることを努め、したがって当時の代表的文学者についてこの傾向の著しい作品を厳密に検討して西欧文学殊にキリスト教の影響した痕跡をたずね、透谷、露伴、藤村等についてはとくに最も力を尽した。その実証的に精緻な考証において独創的な成果を挙げ、多くの新見解と新問題を提出した業績は著しいものがある。これを、日本文学の伝統や様式の変遷に重点をおく文学史として見れば、露伴その他の論考において、多少宗教的価値偏重の感がないでもないが、著者の意図するところは、明治以後の新文学における精神的構成について研究し、近代文学の理念に基づく価値体系をうち立てんとすることにあって、構想の規模の雄大なること、西欧思想に関する理解の確なること、また日本の伝統文学に対する知識の博く深いことは、従来はこの種の文学史に類例なく、研究方法の周到さ、論述の緻密さにおいても稀に見る才能を示している。